

CBCTの撮影を行った。得られた画像データ上で正中部と左右側切歯-犬歯間部において次の項目について計測を行った。

①唇舌断面上の歯槽頂から下顎下縁までの垂直的距離

②唇舌断面の最大幅径

③唇舌断面上の骨梁面積率

【結果】①垂直的距離の計測結果は、正中部は 21.8 ± 5.9 mm、左右側切歯-犬歯間部は 21.6 ± 6.6 mmであった。正中部と左右側切歯-犬歯間部では有意差はみられなかった。

②最大幅径の計測結果は、正中部は 13.4 ± 1.2 mm、左右側切歯-犬歯間部は 11.7 ± 1.3 mmであった。正中部と左右側切歯-犬歯間部で有意差がみられた。

③骨梁面積率の計測結果は、正中部では $47.7 \pm 11.9\%$ で左右側切歯-犬歯間部は $36.1 \pm 7.2\%$ であった。両者の間に有意差がみられた。

【考察】以上の結果より、1-IOD作成に際してのインプラント埋入において正中部は2-IODの際に埋入する左右側切歯-犬歯間部より埋入時のポジショニングに自由度が高くとれる可能性が示唆された。また、正中部の骨梁は密に存在しており、インプラントの荷重負担能力が高い可能性があることが示唆された。

10) 地域医療支援歯科における障がい者歯科診療の現状について

○佐々木重夫, 福島 和美, 宮嶋 唯, 箱崎 麗子
清野 晃孝, 瀬川 洋, 杉田 俊博
(奥羽大・歯・附属病院)

【緒言】2016年、奥羽大学歯学部附属病院に新しい診療科として地域医療支援歯科が開設され、業務の1つとして“障がい者歯科診療”の専門部署が設けられた。

1999年から障がい者の歯科診療は歯科保存系および歯科補綴系歯科医師2ないし3名で構成したチーム診療として対応してきた。その利点として保存、補綴に特化した者が症例別に対応するため、患者本人や保護者などの希望に沿った治療を提供することが可能となったが、問題点としてチームの各自が自己の業務に従事しているため、

初診来院時や緊急時の対応に遅れを生じることがあったり、担当者が複数科に所属するため予約日時の決定に難渋したりしていた。

今回は2016年度から2018年度の地域医療支援歯科における障がい者歯科診療の現状について報告する。

本調査に関しては奥羽大学倫理委員会の承認(第240号)を得て実施した。

【対象および方法】

1. 障がい者歯科診療チーム数の変化

2016年度以前と2016年度からの歯科診療チーム数の変化について調査した。

2. 初診来院の理由

2016年度から2018年度に初診来院した障がい者151名についての来院理由を調査した。

3. 歯科診療における行動調整

初診来院した障がい者151名について歯科診療時の行動調整について調査した。

4. 障がい者施設の歯科健診

2016年度から地域医療支援歯科が中心となって歯科健診を実施している福島県内の3施設について調査した。

【結果および考察】

1. 地域医療支援歯科が開設された2016年度は以前と同様の6チーム編成での対応であったが、2017年度は4チーム、2018年度は3チームとチームの削減が可能となった。

2. 来院理由は“(保護者などによる)独自の来院”, “院外の歯科・医科の紹介”, “院内他科の依頼”, “施設の依頼”, “患者間の口コミ”の順に多かった。

3. 歯科治療時の行動調整として85.4%の者が全身麻酔法で対応されており、本院における障がい者の全身麻酔下での歯科診療件数は年次増加傾向を示した。

4. 歯科健診の報告書より歯科治療が必要と判断された者の64.0%が本院を受診していた。また、歯科健診の際の人員確保を円滑に行うことが可能になった。

障がい者の専任部署を設けたことは患者ならびに歯科医師の双方にとって有益であったと考えられた。